

慢性疾患患児の効果的な指導について考える

～発達段階に応じたプリパレーションを通して～

福岡赤十字病院 北2階病棟 嘉村 仁美

キーワード：プリパレーション，自己管理能力，発達段階

I. はじめに

小児期に発症するネフローゼ症候群では、比較的予後が良好なものがほとんどであるが、再燃を繰り返し、慢性的な経過をたどる例もある。小児にとって、疾患や治療に伴う苦痛や不安は成長発達に大きな影響を及ぼす可能性がある。そこで、患児なりに検査や処置の必要性を理解し、治療を受け入れることができるよう援助していく必要がある。

また、再燃を繰り返すことのないよう、成長発達段階に応じた自己管理への指導も重要となる。

今回、ネフローゼ症候群再燃のため、再入院した学童初期の患児に対しプリパレーションを行った。その関わりを振り返り、検討したので報告する。

II. 用語の定義

プリパレーション：子どもの病気や入院によって引き起こされる心理的混乱を最小限にし、子どもや親の対処能力を高めるケア(心理的準備)。

III. 研究方法

1. 研究デザイン：事例研究

研究期間：H16.5.17～10.1

2. 患者紹介

患児：Nちゃん，6歳，女児，小学1年生

診断名：ネフローゼ症候群

性格：普段は温厚。気に入らないと癩癩をおこすこともある。工作が得意で何かを作って遊ぶことが多い。理解力はよい。

家族背景：父親，母親と3人暮らし。祖父母との二世帯住宅である。前回の退院から約1年での再燃であり，母親にショックの言葉が聞かれたが，治療に前向きに協力できている。

入院期間：H16.5.17～7.31

経過：4歳の時に発症し入院。ステロイド療法により寛解していた。外来通院中で順調に経過していたが，学校検尿で尿蛋白4+，外来でも3+あり入院となる。

入院後はステロイドの内服開始となり個室での室内安静と減塩食であったが，経過

良好で徐々に安静度も拡大し普通食となる。小学校1年生であり，学習面での遅れを補うために院内学級へ通学する。

感冒症状やステロイドの重篤な副作用は無く，安定した経過で退院となる。

一人入院であり，父親と母親は毎日来院していた。

IV. 看護介入と結果

1. 看護目標

- (1)自分の疾患に興味を持つことができる。
- (2)治療，検査を嫌がらず行うことができる。
- (3)腎臓の形，場所，はたらきが言える。
- (4)退院後の生活で気をつけることができる。

2. 指導内容

- (1)腎臓の形，場所，機能(尿の生成)
- (2)病気になった時の腎臓(尿蛋白の漏出)
- (3)生活上の注意点

- ・感染予防
- ・外来通院
- ・蛋白測定試験紙での尿蛋白チェック
- ・自覚症状出現時の対処
- ・塩分控えめ，バランスの良い食事

3. 実際

Nちゃんは以前の入院のことを覚えており，看護師や入院生活にはすぐに慣れた。自覚症状が無く，安静が守れないことやプレドニンを「苦いから嫌」と飲もうとしないこともあったが，必要性を説明し，承認し賞賛することで応じることができた。プレドニンは拒否することは無くなり，看護師に「お薬，ゼリーで飲めたよ」と報告するようになり，自分から看護師室まで内服を取りに来る姿も見られるようになった。

Nちゃんは感染予防や内服の必要性については理解できたが，自分の疾患に対する興味は無かった。そこで，Nちゃんなりに自分の疾患について理解をし，自己管理に留意して行動できるよう指導計画を立てた。また，家庭での育児方針について母親に話を聞き，指導の参考にした。自分でできることはすること，約束は守ることに気をつけているとの情報を得た。さらに，何かを作るのが好きだか

ら、一緒に作成する方法もいと提案された。

Nちゃんにも一緒に病気のお勉強をしようとして話し、どういう方法が好きか尋ねた。勉強は嫌い、パーツを合わせるのが好き、それなら頑張れるという言葉が聞けた。

指導は症状が落ち着き、院内学級にも慣れた頃より行った。1回の時間は集中力が続く10~15分程度とし、児の精神状態など状況を見ながら進めた。母親にも事前に指導計画について話し、来院時は一緒に行った。

食べ物が口に入って消化される様子を描いた紙芝居を見せると興味深く真剣に聞いていた。また、ビタミンや脂肪、蛋白など食べ物に含まれる栄養素をキャラクターとして登場させると「ビタミンさん、蛋白さん」など楽しんでた。看護師に「今日は蛋白さん出てきたよ」と紙芝居の内容について教え、食事の際、このおかずには蛋白さんが入っているよと声をかけると「蛋白さん、蛋白さん」とつぶやきながら食べる姿が見られた。

紙芝居により、体のことや蛋白について意識づけができ、腎臓について指導を進めた。Nちゃんの病気は腎臓の病気であること、腎臓はそらまめの形をしていること、おなかの横に2つあることなどNちゃんの体を指して説明し、色画用紙で一緒に腎臓の形を切り、人間の絵に貼っていった。また、扉をつけ、開くと腎臓の場所がわかるしかけにし、心臓や胃の場所と区別ができるようにした。Nちゃんはすぐに覚え、繰り返し使用した。

次に、腎臓の機能について指導した。母親も来院しており一緒に行った。腎臓や膀胱の絵をシールで作り、紙芝居に出てきた蛋白さんのキャラクターを用いて健康な時と病気の時の尿の生成について説明した。病気の時は、おしっこに蛋白さんが降りてきてしまうから検査で蛋白が出ること、Nちゃんが尿検査しているのは蛋白さんを見るためであることを話すと、「じゃあこっちは蛋白プラスで、こっちはマイナス？」と児なりに考え、理解に結びついてる様子であった。母親も腎臓の役割を金魚の水換えに例えて話していた。

続いて、生活上の注意について指導した。Nちゃんの好きなポケットモンスターのキャラクターの絵を用い、マスクや検尿コップ、聴診器、塩や野菜などのパーツを見せ、気をつけることをNちゃんに答えてもらい、キャラクターに貼り付けた。Nちゃんが答えに詰まった時は助言しながら進めた。

この内容を繰り返し、理解を確認した。質

問すると「覚えてるよ」と答え、復習も嫌がらず行えた。「今日は〇時からするよ」と声をかけると、時間になると「腎臓のお勉強しよう」と呼びに来る姿もあった。部屋から出る時は自分でマスクをつけ、忘れて遊んでいても「あ、マスク忘れてた」と部屋に取りに行く様子が見られた。尿蛋白について「今日はプラマイだったー、あ〜あ」などの言葉が聞けるようになった。

Nちゃんは食事の理解も良く、料理の本を見たり、工作で食べ物を作り食べるまねをしたりしながら、病院食以外は食べないよう頑張ることができていた。家では減塩醤油を使用していることや、ラーメンやうどんの汁は飲まないこと、ポテトチップは食べてない、今日は食べ過ぎちゃったなど話してくれ、気をつけていることを誉めると笑顔が見られた。

順調に経過し退院となったが、Nちゃんが指導内容を理解し、行動につなげているか外来通院時に確認した。

母親に家庭での様子を尋ねると、指導内容は理解しており、時々思い出したように指導に使用した絵など見ていると聞けた。母親も一緒に、Nちゃんに質問したり教えたりと協力が得られていた。Nちゃんに指導内容について尋ねると覚えていた。また、学童保育で出たおやつは塩辛いものは家に持って帰るという約束も守れ、手洗いうがいがいもできているとのことだった。Nちゃんから「この前、カレーを食べ過ぎちゃった。ラーメンは塩辛いから食べに行かなくて家で作るようにしてる」など報告してくれた。目標を決めて頑張っていこうと話すと、「おしっこを探る」と決めた。家での試験紙による蛋白測定検査は、寝坊してトイレに行かないまま学校へ行ったり、忘れて流してしまったりすると母親も話しており、児なりに気をつけようと感じたようであった。その後も、時折忘れるが嫌がらず採尿できているとのことであり、頑張りを認めていった。尿検査で蛋白がマイナスだったとわかると「やったー」と喜んだり、遠足に参加してよいか主治医に聞いたりする姿も見られた。入院当初は言えなかった自分の病名も言えるようになった。

V. 考 察

現在、児童権利宣言やEACH憲章などにもあるように、子どもの倫理的配慮が重要視されている。子どもの意思の尊重やインフォームドコンセントのため、十分なプリパレーションを行っていくことの必要性を感じた。

Nちゃんにも、検査や治療、指導において、児の希望を取り入れながら理解を促すような援助に心がけた。さらに、できていないところを注意するのではなく、できていることを承認し賞賛していった。Nちゃんは安静を守れるようになり、プレドニンの内服も自ら行い報告し、薬を受け取りに来るようになった。学童期は、目的行動が可能となり、目標に到達すれば達成感を味わい、「やればできる」という自信を少しずつ身につけていく。また、親や教師や年上の人から励ましや承認を受けることにより、自分のしたことを価値あるものと思ひ、自尊心も獲得していく時期であると言われている。安静や内服の必要性を話すことで目的意識を持って行動に結びつけることができ、承認されることで満足感や達成感につながったと思われる。

また、エリクソンによると学童期は小学校に就学し、社会性や勤勉性を習得する時期といえる。Nちゃんも前回入院時の幼児期から学童期へ移行していく段階であり、説明すれば自分で考え理解できる年齢である。そこで、この時期に、少しずつ自分の疾患について認識を持つことが今後の自己管理行動へつながるのではないかと考え、指導計画を立てた。

Nちゃんは、自分の疾患に興味が無く、勉強も嫌いであった。そのため、指導はまず体について意識できるような紙芝居から開始し、徐々に反応を見ながら段階的に進めていった。その上で、勉強嫌いな児が嫌がらず取り組めるよう、興味を持てる媒体を使用するよう心がけた。また、指導を開始する時期や時間についても集中できるよう配慮した。

指導方法や留意点について、キーパーソンである母親から情報を得ることはNちゃんのことを理解し、育児方針に沿って進めていく上でも重要であった。Nちゃんは家でも言われている通り、自分でできることは行い、約束は守るよう心がけていた。さらに、母親と話し合うことで協力して指導に取り組むことができ、家庭での関わりにつなげることができたと考える。

患者指導において、最も重要なのは本人の意思である。そこで、Nちゃんの希望を聞いて指導の方法に取り入れていった。Nちゃんは工作が得意なことや、主体的に参加でき、視覚的に楽しく学べることに気がつけた。紙芝居にも興味を持って、蛋白さんのキャラクターを続けて用いることは児の意識付けや継続的な指導につなげることができたように思う。

また、Nちゃんが指導時間になると呼びに来たり、復習も嫌がらなかったことより、理解を確認しながら段階的に進めていくことで、拒否することや無理なく実施できたと考える。

退院後も指導に使用した媒体について時折目を通し、内容も覚えていた。Nちゃんの好きな媒体を用い、本人用として持ち帰ってもらったことは、家で振り返ることにつながり効果的であったと考える。また、本人に頑張ることを目標として考えてもらうことは、意識付けになったと思われる。

Nちゃんは腎臓が尿を生成すること、病気になると蛋白尿が出ること、病名など以前は言えなかったことが言えるようになった。また、尿蛋白の値を気にするようになり、食事について気をつけていることを報告してくれた。Nちゃんの最終目標や行動について、どう評価していくか悩んだが、このように以前の行動変化を得られたことは、児なりの理解や自己管理活動において効果的であったと考える。今後、さらに成長発達を遂げる児に対し、意識の向上を図れるような援助について考慮していく必要性を感じた。

VI. 結論

1. 年齢や発達段階に応じた説明や指導を行うことで、患児なりに理解ができ、疾患や治療に対する苦痛を軽減できる。
2. 事前に患児の好きなことを本人や母親から情報収集を行い、看護介入に取り入れていくことは指導において有効である。
3. 患児の希望を叶えていけるよう関わることも信頼関係を築く上で重要であり、よりよい関係を築くことは効果的な看護介入にもつながる。

VII. 終わりに

今回、Nちゃんとの関わりを通し、小児看護におけるプリパレーションの重要性を改めて感じた。また、患児の成長発達に配慮した指導のあり方について学ぶことができた。

この学びを活かし、継続看護や小児に対する日々の看護介入について考えていきたい。

VIII. 参考文献

- 1) 富永智栄子、他：小児看護 インフォームド・コンセントのすすめ方、ヘルス出版、2000、12
- 2) 兵庫県こども病院看護部他：小児看護プリパレーションその方法と工夫の仕方、ヘルス出版、2002、2
- 3) 服部祥子：生涯人間発達論、p 43～68、医学書院、2000
- 4) 岡堂哲雄：パーソナリティ発達論、p 38～62、金子書房、2000